

ラムの神秘一致の国粋思想が精神動員され、民衆の政府に対する不満をそらしている」とある。やっと最初の憲法が制定されて2年足らずの時点で、現在ある問題の多くがパキスタン社会にすでにあった。さらにこの後、アフマディーヤ迫害や宗派間の暴力など、宗教的偏狭は1958年当時よりもさらに悪化していく。パキスタンの理想とは、ムスリムが自由に生きることができると同時に、宗教的寛容をそなえた社会を実現することであったとすれば、仮に普通選挙による議会制度や三権分立など民主主義の形式的な要件が安定的に満たされたとしても、パキスタン政治の問題の解決にはならない。パキスタン政治は、未だ果たされないままの建国の理想を追求することを、国民から託されているはずだからである。筆者は今日のパキスタン政治を見る際の問題意識を、改めて厳しく問われている思いがした。

加賀谷寛著作集は、若い研究者から年長の研究者まで、それぞれの立場なりに、多くの示唆を得、また自らを省みて問題意識を新たに作る機会を与えてくれるだろう。編者のご尽力に心から敬意を表する次第である。

(井上 あえか 就実大学人文科学部教授)

秋葉淳・橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史——オスマン帝国からの展望』(叢書・比較教育社会史) 昭和堂 2014年 vii+295+xiii 頁

本書は、比較教育社会史研究会によって編まれた『叢書・比較教育社会史』の第二期(展開篇)のなかの一冊である。第一期の『叢書・比較教育社会史』は、2003年から2010年の間に全7巻が刊行され完結し、その後、第二期が編まれた。その第二期において中東・イスラーム地域を対象とする本書が刊行された。

本書は、比較教育学を専門とし、主な研究フィールドをマレー世界のイスラーム社会におく筆者にとって待望の一冊である。19世紀から20世紀における東南アジア地域のイスラームを研究する場合、同時期中東・イスラーム地域の動向を抜きに考えることは到底できない。東南アジアのウラマー(学識者)たちの多くは中東地域から多くの刺激を受け、故郷でそれぞれの改革運動を展開したからである。当時、東南アジア地域で発刊された雑誌やウラマーの著作には「中東」の思想が紹介されている。しかし、「中東」の思想が一体、どのような社会的文脈で生まれたものなのか、また当地の社会状況はいかなるものであったのかをそれらの雑誌から掘り取ることは困難であり、多くの謎はブラックボックスのなかにあった。本書はこれらの疑問に対して多くの貴重な情報を提供してくれている。このことは、他の地域を対象とするイスラーム研究においても同様であろう。

本書はその意味で、中東・イスラーム地域の歴史を専門としない筆者にとって、批判的に読むどころか、勉強させていただくことばかりであった。さいわいにも本書では、各部の冒頭に、イスラーム史やオスマン帝国史に馴染みのない読者のために前提的知識を提供するイントロダクションが設けられており、わかりやすく論点が提示されているため、大変役立った。この他にも、本書は、各章の連関性が明確に読み取れるよう、各執筆者が議論を重ね、お互いが各章を参照するなど、さまざまな工夫と配慮が施されている。大変丁寧に仕上げられた著作である。

本書は3部からなり、序章と終章のほか、9章から構成される。

序章(秋葉 淳)

第I部 イスラームの近代——知の伝統と変革

第1章 「伝統教育」の持続と変容——19世紀オスマン帝国におけるマクタブとマドラサ(秋葉 淳)

第2章 スーフイズムの知と実践の変容——エジプトの事例から(高橋 圭)

第II部 19世紀オスマン帝国の改革と展開——変容する知識空間と社会構造

第3章 オスマン帝国の新しい学校(秋葉 淳)

第4章 ジャーナリズムの登場と読者層の形成——オスマン近代の経験から(佐々木紳)

第5章 アルメニア人オスマン官僚の教育的背景(上野雅由樹)

第6章 歴史教科書に見る近代オスマン帝国の自画像(小笠原弘幸)

第III部 接続する帝国、交錯するネットワーク

第7章 ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域ムスリム社会の「新方式」の教育課程 (磯貝真澄)

第8章 ハブスブルクとオスマンの間で——ボスニアの「進歩的ムスリム」による教育改革論
(米岡大輔)

第9章 帝国のメディア——専制、革命、立憲政 (藤波伸嘉)

終章 (橋本伸也)

序章では、本書を編む際の研究のねらいや意図が、最新の研究動向とともに明瞭に述べられている。日本における中東・イスラーム史研究においては、前近代の教育的分野を中心にウラマーを介した知の伝達や教育活動に関する研究の蓄積があり、さらに1990年代以降、19世紀から20世紀に起こる伝統的教育から近代教育への移行を批判的に考察する研究が現れてきたという(p.4)。一方、編者が指摘するように、「これまで日本における教育史学界のなかでは、中東・イスラーム地域の教育史が占める場所はほぼ皆無であった」(p.2)ことは確かである。本書は、そのような教育史学界における関心の不在に対する問題提起(p.5)にもなっている。

第I部「イスラームの近代——知の伝統と変革」は2つの章(第1～2章)からなり、近代的な学校教育制度の導入と出版の普及がもたらした、伝統的なイスラームの知やその伝達・継承のあり方の変容と持続が論じられる。第1章では19世紀のオスマン帝国におけるマクタブとマドラサにみる知の伝統と変革について、第2章ではエジプトにおける教団管理制度の成立によるスーフイズムの知と実践の変容、それと並行して行われたアズハル教育制度改革について論じられている。

第II部「19世紀オスマン帝国の改革と展開——変容する知識空間と社会構造」は4つの章(第3～6章)からなり、オスマン帝国の改革という文脈のなかで学校教育と出版が論じられる(p.11)。第3章では19世紀以降のオスマン帝国における、国家による学校教育制度の導入と展開について、第4章では出版文化に焦点を当て、オスマン社会における新聞の普及とジャーナリズムの形成について、第6章では「国家的メディア」である教科書に着目し、オスマン帝国の公立学校で用いられた歴史教科書における国家の自画像について論じられている。対して、第5章ではオスマン社会に居住する非ムスリムであるアルメニア人に焦点をあて、官吏として任用されたアルメニア人の教育的背景を明らかにしている。

第III部「接続する帝国、交錯するネットワーク」は3つの章(第7～9章)からなる。これらの章では、考察の対象をオスマン帝国から、ロシア帝国、さらにハブスブルク帝国へと拡大している。本書の視野の広さと奥行きがもっとも顕著に表れているのがこの第III部である。第7章ではロシア領のヴォルガ・ウラル地域におけるテュルク系ムスリム社会における出版文化と新方式教育の展開、第8章ではハブスブルク帝国に占領され、のちに併合された旧オスマン領ボスニアのムスリム社会における教育改革論、第9章ではオスマン帝国の内外に広がる多言語の出版ネットワークが論じられている。

終章では、オスマン、ロシア、ハブスブルクという3つの帝国空間をまたぐ、越境的かつ多様な紐帯とネットワークが描き出されると同時に、さらなる比較史、関係史研究の可能性が示唆されている。

冒頭でも述べたように本書は圧巻の著作であり、評価に値する多くの点がある。そのことをふまえた上で、特に教育学研究者の立場から、筆者が考える本書の学術的意義について3点、述べておきたい。

第一に、編者も述べているように、教育史学界における中東・イスラーム地域を対象とした研究の不在に対し、主に歴史学研究者によって編まれた本書は先駆的な研究成果であり、教育史研究ひいては教育学研究全体に対して重要な問題提起をしている点である。そこには2つの意味が含まれる。一つは、研究対象地域としての中東・イスラーム地域、なかでもオスマン帝国は、19世紀から20世紀にかけて共時的に起こった近代学校教育の成立と浸透を考える上で非常に示唆的な地域であることを本書が実証した点である。編者も述べている通り、第一次世界大戦で降伏するまで独立を保ったオスマン帝国の「近代の道のりは、植民地化されたアジア・アフリカの他の地域とは異なるものとなっている」(p.6)。中東・イスラーム地域における教育史研究は、西洋教育史あるいはアジア教育史を再考する新たな参照軸となる。もう一つは「教育」の捉え方である。本書では、「教育」を狭い意味での学校や教育だけでなく、社会における知識の伝達や継承の間

題として広く捉えている (p.5)。教育学研究は、ともすればその研究対象を学校あるいは狭義の教育に狭めがちであるが、中東・イスラーム地域における教育社会史研究を通し、改めて広い文脈で教育を捉えることの重要性を本書は示唆している。

第二に、19世紀のイスラーム世界において中心的な地位にあったオスマン帝国の教育社会史、特に近代教育社会史の展開を、オスマン社会の歴史的な文脈のなかで緻密に考察している点である。冒頭でも述べたように、19世紀から20世紀にかけてのオスマン帝国の動向を理解することは、他のイスラーム世界の動向を理解する上で必須である。筆者の専門にそくして言えば、東南アジアのイスラーム社会における教育の展開を考える上で、オスマン帝国の経験を活かすことはできない。蘭領東インドで20世紀初頭以降に出版された雑誌にはオスマン帝国、そしてその後のトルコ共和国に関する記事が数多くみられる。東南アジアのイスラーム社会にとって中東・イスラーム地域は常に重要な先進的地域であった。その意味で本書は、オスマン帝国を主な対象地域とする研究でありながら、他のイスラーム地域研究の深化に重要な貢献をしている。

第三に、本書によって設定された研究の射程の広がりや深さである。オスマン帝国とその近接地域のみならず、ロシア、ハブスブルクも対象地域とし、越境するネットワークによって歴史が連動し共鳴する様子が活写されている。本書を読み進めるなかで、生き生きとした歴史のダイナミズムを改めて実感した。本書には、比較史、関係史研究をさらに深化させるうえでヒントとなるような多くの示唆が含まれている。

以上のことから本書は、比較教育学分野、さらに教育史分野において先駆的な研究として位置づけられるものであり、歴史学研究者のみならず教育学研究者にとって必読の書である。オスマン帝国近代の教育史の専著が90年代以降に現れ、その後も教育というテーマが注目を集めている (p.8-9) ことは大変喜ばしく、一方で、教育学、教育史を専門とする研究者の責務について深く内省させられる一冊でもあった。

(服部 美奈 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授)

小杉泰 『イスラームを読む——クルアーンと生きるムスリムたち』大修館書店 2016年 242頁

題名だけを見て、イスラームの入門書がまた一冊増えたか、と思ったのは評者だけではないだろう。だが本書の著者は、学界で常に新たな着想を実証的に提示してきた人物である。したがって本書の内容も、基礎知識を学び覚えるための従来のイスラームに関する解説書や、現地体験の感想とは明らかに異なる。現代のイスラームの諸相に関するエッセイを通して、イスラーム的な思考回路を積極的に読み解く概説書である。かつて大塚和夫氏が2000年に『イスラーム的』を発表し、「イスラーム的」な存在や思考について、特にイスラーム主義の解明を通して現代的な再定義を試みたが、本書の著者はその文庫本刊行にあたり解説を付し、現代のイスラーム復興とは、前近代が蘇ったのではなく、近代教育の申し子たちによる、きわめて現代的な極限状況である [小杉 2015: 337] と定義した。本書は、現代的な極限状況の仕組みを読み解きつつも、急進派などに象徴される狭義のイスラーム主義のみならず、イスラーム的な存在や思考に対するあらゆる視点についての新たな着想を、簡明かつユーモアたっぷりのエッセイで提示している点が特徴である。

著者に関してここで詳述する必要もなからう。著者は1983年、八年間にわたるアズハル大学での留学生生活を経て、帰国後から現在まで精力的に著書や論文を次々と発表し、研究会や学会での活動を通してわが国のイスラーム研究を中心的に担ってきた。「草の根イスラーム」、「イスラーム人生相談書」 [小杉 1996]、「イスラーム復興」、「イスラーム中道派」、「思想の市場性」、「教経統合論」、「ミツラ緑」など、イスラーム研究に関する理論化において、新たな用語を用いて数々試みてきた著者は、自身の研究領域について、イスラーム学、地域研究、比較政治学、国際政治学、比較文明学など多岐にわたっていることを自認している (p. 233)。イスラーム法学や思想に関するテキストを丹念に読む文献学と、現代社会や政治の研究の両輪を融合させることによって、多面的、重層的にイスラームの諸側面を描こうとしてきた著者は、かつて『イスラームとは何か——その宗教・社会・文化』(講談社現代新書) を発表したのが、本書はその続編、エッセイ編にな